

日蓮大聖人御書全集

まつのどののごししょうそく

松野殿御消息

いつしやう こと

(一劫の事)

新版
1982
〜
1985

まつどののろくしょうそく いっほう こと

松野殿御消息（一劫の事）

けんじ ねん がつ にち

建治2年（'76）2月17日 55歳

まつどののろくろうざえもん

松野六郎左衛門

こうじひとこ しゅじゆ もの おく た そうろう

柑子一籠・種々の物、送り給び候。

ほけきようだいしち まき やくおうほん い もろもろ ほし なか

法華経第七の巻の薬王品に云わく「衆の星の中に

がつてんし もつと だいいち

月天子は最もこれ第一なり。この法華経もまたかくのごと

せんまんおくしゆ もろもろ きようぼう なか もつと しょうみよう

く、千万億種の諸の経法の中において、最もこれ照明

うんぬん もん こころ こくう しゆう はんり

なり」云々。文の意は、虚空の星はあるいは半里、ある

いちり はちり じゆうろくり てん まんげつりん

いは一里、あるいは八里、あるいは十六里なり。天の満月輪

はつびやくり けごんぎようろくじっかん はちじっかん

は八百里にておわします。華嚴経六十卷あるいは八十卷・

はんにやきようろつぴやくかん ほうどうきようろくじつかん ねはんぎようしじつかんさんじゅうろくかん

般若経六百卷・方等経六十卷・涅槃経四十卷二十六卷・

だいにちきよう こんごうちようきよう そしつじきよう かんぎよう あみだきようとう むりよう

大日経・金剛頂経・蘇悉地経・觀経・阿弥陀経等の無量

むへん しょきよう ほし ほけきよう つき と

無辺の諸経は星のごとし、法華経は月のごとしと説かれて

そうろうきようもん りゆうじゆぼさつ むじやくぼさつ てんだいだいし

候 経文なり。これは、竜樹菩薩・無著菩薩・天台大師・

ぜん むいさんぞうとう ろんじ にんし ことば きようしゆしやくそん

善無畏三蔵等の論師・人師の言にもあらず、教主釈尊の

きんげん たと てんし いちげん

金言なり。譬えば、天子の一言のごとし。

ほけきようやくおうほん い よ きようてん じゆじ

また法華経薬王品に云わく「能くこの經典を受持するこ

もの かつた いっさいしゆじよう なか

とあらん者もまたかくのごとく、一切衆生の中において、

だいいち とううんぬん もん こころ ほけきよう たも ひと

またこれ第一なり」等云々。文の意は、法華経を持つ人は、

なん

でんぷ

そつろ

さんがい

しゆ

男ならば、いかなる田夫にても候え、三界の主たる

だいぼんてんのう　しやくだいかんいん　しだいてんのう　てんりんじようおうないしかんど　にほん

大梵天王・釈提桓因・四大天王・転輪聖王乃至漢土・日本

こくしゆとう

すぐ

にほんこく

だいじん

の国主等にも勝れたり。いかにいわんや、日本国の大臣・

くぎよう

げんぺい

さむらい

ひやくししようとう

すぐ

もう

およ

公卿・源平の侍・百姓等に勝れたること、申すに及ばず。

によにん

きようしかによ

きちじようてんによ

かん

りふじん

ようき　ひとう

女人ならば、橋戸迦女・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の

むりようむへん

いつさい

によにん

すぐ

と

そつろ

無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候。

あん

きようもん

もう

案ずるに、経文のごとく申さんとすれば、おびただしき

ひと　用

難

しん

おも

ようなり。人もちいんこともかたし。これを信ぜじと思え

によらい

きんげん

うたが

とが

きようもんあき

あびじごく

ごう

ば、如来の金言を疑う失は、経文明らかに阿鼻地獄の業と

見えぬ。進退しんたいわずらい有り、いかがせん。

この法門ほうもんを、教主きようしゆしやくそん釈尊しじゆうよねんは四十余年あいだが間むねは胸うちの内うちにかく隠

させ給たまう。さりおんとししちじゆうにとてはとて、御年もう七十二と申せしに、

南閻浮提なんえんぶだいの中ちゆうてんじくおうしやじよう天竺王舍城うしとらの丑寅ぎしやくつせん、耆闍崛山とにして説かせ

給たまいき。今いま、日本国にほんこくには仏御入滅ほとけごにゆうめつ一千四百余年せんしひやくよねんと申せしに

来りぬきた。それより今いま、七百余年しちひやくよねんなり。先さきの一千四百余年いつせんしひやくよねんが間あいだ

は、日本国にほんこくの人ひと、国王こくおう・大臣だいじん乃至ないし万民ばんみん、一人いちにんもこのことを知し

らず。

今いま、この法華経ほけきようわたらせ給たまえども、あるいは念仏ねんぶつを申もうし、

あるいは真言しんごんにいとま暇を入れ、禅宗・持斎ぜんしゆうなど申し、あ

るいは法華經ほけきようを読む人は有りしかども、南無妙法蓮華經なんみやうほうれんげきようと

唱となうる人は日本国ひと にほんこくに一人も無し。日蓮いちにん な、始めて建長五年夏にちれん はじ

の始めより二十余年が間はじ にじゆうよねん あいだ、ただ一人、当時の人の念仏いちにん とうじ ひと ねんぶつを申

すようとなに唱ひとうれば、人ごとひとにこれを笑い、結句わら けつくは、のり、う

ち、切りき、流ながし、頸くびをはねんとせら刎るること、一日二日、一月いちにちにち ひとつき

二月ふたつき いちねんにねん、一年二年きよう もんならざれば、こら堪うべしともおぼえ候覚わね

ども、この經きようの文を見候みえば、檀王だんのうと申せし王もうは、千歳おう せんざいが

間あいだ あしせんじん、阿私仙人せに責めつかわれ、身みを牀とことなし給たもう。不輕菩薩ふきようぼさつ

もう

そう

たねん

あいだ

あつく

めり

とうじよう

がりやく

と申せし僧は、多年が間、悪口・罵詈せられ、刀杖・瓦礫

こうむ

やくおうぼさつ

もう

ぼさつ

せんにひやくねん

あいだみ

焼

を蒙り、薬王菩薩と申せし菩薩は、千二百年が間身をやき、

しちまんにせんさい 臂

や たも

み

七万二千歳ひじを焼き給う。これを見はんべるに、いかな

せ あ

塞 とど

おも

こころ

る責め有りとも、いかでかさてせき留むべきと思う心に、

いま

たいてんそうら

今まで退転候わず。

ざいけ おんみ

みなひと 憎

そうろう

しかるに、在家の御身として、皆人にくみ候に、しか

げんざん

い

そうら

おぼ

ごしんよう

もいまだ見参に入り候わぬに、いかにも思しめして御信用

かこ しゆくじき

らいじよう

あるやらん。これひとえに過去の宿植なるべし。来生に

かなら ほとけ

な

たも

ご

きた

催

心

必ず仏に成らせ給うべき期の来つてもよおすこころなる

べし。その上、うえ きようもん 經文には、鬼神の身に入る者はこの經を信きじん み い もの きよう しん
しゃかぶつ おんたましい い 替 ひと きよう しん ぜず、み そうら みず つき かげ い 釈迦仏の御魂の入りかわれる人はこの經を信みず すずと
みこころ みず きようしゆしやくそん つき かげ い たも 頼 見えて候えば、水に月の影の入りぬれば水の清むがごとく、
おぼ そうろう 御心の水に教主釈尊の月の影の入り給うかとしたのもしく
覚え候。

ほけきよう だいし ほつしほん い ひとあ ぶつどう もと 法華經の第四の法師品に云わく「人有つて仏道を求めて、
いっこう なか がつしよう わ まえ あ むしゆ げ 一劫の中において、合掌し我が前に在つて、無数の偈をも
ほ さんぶつ よ ゆえ むりよう くだく え つて讚めば、この讚仏に由るが故に、無量の功德を得ん。
じきようしや たんみ ふく かれ す とううんぬん もん 持經者を歎美せば、その福はまた彼に過ぎん」等云々。文の

こころ いっこう あいだきようしゆしやくそん くよう たてまつ まつだい

意は、一劫が間教主釈尊を供養し奉るよりも、末代の

せんち ほけきよう ぎようじや じようげばんにん 怨 がし

浅智なる法華經の行者の上下万人にあだまれて餓死すべ

びくとう くよう くどく すぐ きようもん いっこう

き比丘等を供養せん功德は勝るべしとの經文なり。一劫と

もう はちまんり そうら あお いし 鑪

申すは、八万里なんど候わん青めの石をやすりをもつて

むりようこう あいだ磨 尽 ぼんてんさんしゆ ころも もう

無量劫が間するともつきまじきを、梵天三銖の衣と申し

極 細 美 天 はごろも さんねん

てきわめてほそくうつくしきあまの羽衣をもつて、三年に

いちどくだ 撫 尽 いっこう もう

一度下つてなずるに、なでつくしたるを一劫と申す。この

あいだ むりよう たから くよう じよくせ

間、無量の財をもつて供養しまいらせんよりも、濁世の

ほけきよう ぎようじや くよう くどく 勝 もう もん

法華經の行者を供養したらん功德はまさるべきと申す文

なり。

しん

ほけきよう

体

このこと信じがたきことなれども、法華経はこれにい

夥

実

こと

数多

おびただしくまことしからぬ事どもあまたはんべり。また

しん

思

たほうぶつ

しょうみよう

くわ

きようしゆしやくそん

信ぜじとおもえば、多宝仏は証明を加え、教主釈尊は

しようじき

きんげん

名乗

たも

しょうぶつ

こうちようぜつ

ぼんてん

付

正直の金言となのらせ給う。諸仏は広長舌を梵天につけ

ちち

讓

はは

じよう

添

けんおう

せんじ

くだ

たも

ぬ。父のゆずりに母の状をそえて賢王の宣旨を下し給うが

みつ

いちどう

たれ

うたが

ごとし。三つこれ一同なり。誰かこれを疑わん。されば、

うたが

ひと

むくろんじ

したいつ

わ

すうほっし

した

これを疑いし人、無垢論師は舌五つに破れ、嵩法師は舌

爛

さんがいぜんじ

げんしん

だいいじゃ

とくいち

したやっ

裂

ただれ、三階禅師は現身に大蛇となる。徳一は舌八つにさけ

ほけきよう

ぎようじゃ

もち

にき。それのみならず、この法華経ならびに行者を用いず

み 損

いえ

失

くに

亡

ひとびと

がつし

して、身をそんじ、家をうしない、国をほろぼす人々、月支・

しんたん

かず

知

だいいち

にってん

あした

ひがし

い たも

震旦にその数をしらず。第一には、日天、朝に東に出で給

だいこうみよう

はな

てんげん

ひら

なんえんぶだい

みたま

うに、大光明を放ち天眼を開いて南閻浮提を見給うに、

ほけきよう

ぎようじゃ

こころ

かんき

ぎようじゃ

憎

くに

法華経の行者あれば心に歓喜し、行者をにくむ国あれば

てんげん

瞋

くに

睨

たま

しじゆうもち

くに

天眼をいからしてその国をにらみ給い、始終用いずして国

ひと 憎

ゆえ

な

戦

起

たこく

くに

の人にくめば、その故と無くいくさおこり、他国よりその国

やぶ

み

そろう

を破るべしと見えて候。

むかし

とくしようどうじ

もう

幼

もの

つち

もちい

しゃかぶつ

昔、徳勝童子と申せしおさなき者は、土の餅を釈迦仏

くよう

たてまつ

あいくだいおう

う

えんぶだい

しゆ

な

に供養し奉つて阿育大王と生まれて、閻浮提の主と成つ

けつく

ほとけ

成

いま

せしゆ

かしとう

ほけきよう

て、結句は仏になる。今の施主の菓子等をもつて法華経を

くよう

じゆうらせつによとう

よろこ

たも

供養します。いかに十羅刹女等も悦び給うらん。こと

つ

そうろう

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

ごとく尽くしがたく候。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

にがつじゆうしちにち

にちれん

かおう

二月十七日

日蓮

花押

まつのだのごへんじ

松野殿御返事